

外国語環境における日本語の指示詞コソアの習得状況	
単 娜	国際日本学専攻
期間	2007年11月18日～2007年11月29日
場所	中国
施設	11月18日～11月20日 杭州（浙江工業大学） 11月21日～11月25日 北京（北京日本学研究中心、北京外国語大学、北京工業大学） 11月26日～11月29日 大連（大連理工大学、大連外国語大学）

内容報告

本海外調査研究では、日本語を外国語として学習している環境において、日本語学習者の指示詞コソアの習得状況を調べた。そのため日本語教育を実施している中国の高等教育機関に協力を求め、調査を行った。また、比較群として、中国で中国語を第二言語として習得している環境において、日本人学習者の中国語の指示詞の習得状況を調べた。これまでの研究では、指示詞の習得に影響を与える要因として、第一言語（母語）、目標言語能力、インプットなどが挙げられる。本海外調査研究は、学習者の母語要因が指示詞の習得研究に与える影響をより明確にすることを目的としている。学習環境の影響を排除できるため、日本国内でのデータ収集のほか、日本国外のデータ収集も必要であった。また、インプットの究明という観点から学習者が普段利用している教材を調べる必要があるが、外国環境で使われる教材の多くは、日本では手に入らず、現地ではしか入手できないものが多いため、学習者が学習している現地において調査する必要性があった。以下では本海外調査研究の成果として、簡潔に現時点での調査結果を述べ、報告に代える。

1. 本海外研究調査の目的・必要性

本研究の主な目的は、(a)中国で日本語を学習している中国人学習者の日本語の指示詞の習得状況を調べること、(b)比較対象群として、中国で中国語を習得している日本人学習者の中国語の指示詞の習得状況を調べること、の二点であった。その理由は主に以下の3つが挙げられる。

- (1) 習得に影響を与える要因が母語であることを明確にするためには、その他の要因(例えば学習環境・言語能力等)を排除できるようなデザインが必要であり、日本国外のデータ収集が必要である。

- (2) インプットの究明という観点から学習者が普段利用している教材を調べる必要があるが、現地であれば具体的な教材の調査が難しい。特に教育機関で使用されている自作教材は、一般的に市販されていないものが多く、日本では入手しにくい。
- (3) 比較群として、中国で中国語を習得している日本人学習者の調査も必要な為、中国で調べなければならない。

2. 本海外研究調査の位置づけ・研究課題

指示詞は殆どの言語に存在しているものの、言語によって、指示詞の構造や使い分け規則が異なることが少なくない。日本語教育の立場から見た場合、日本語の指示詞は初級の段階で導入されることが殆どであるが、上級になっても指示詞の誤用が目立つことは指摘されており、学習者にとって習得が難しい文法項目であると言われている。

学習者の指示詞の使用傾向や誤用に注目し、学習者の第一言語（母語）との関連性を検討する研究が数多く行われており、その結果、「指示詞の習得に、(1)母語知識への依存による負の転移があること、(2)母語知識への依存による正の転移があること、(3)母語知識に依存しないことが示されている」(単2005:70)。指示詞の場合は、母語で完成された認識の仕方は、容易に目標言語に転移することが考えられる。日本語の指示詞は「コーソア」という3項対立の指示体系を成している。対して、英語は「this - that, here - there」、中国語は「這(zhe) - 那(na)」と、それぞれ2項対立の指示体系を成している。日本語の指示詞の習得における母語の影響（転移）は、学習者の母語と目標言語の日本語との指示体系の違いに起因することがしばしば指摘されている。

渡邊（1996）は、日本語学習者の談話展開のスタ

イルを調査し、日本人母語話者のものとの比較を行った。調査項目のひとつである指示詞に関しては、韓国人学習者、ドイツ人学習者が日本人母語話者同様に照応のソ系を多用しているのに対し、中国人学習者がア系を用いる誤用が多いことは観察された。渡邊は、韓国語は照応体系が日本語に極めて似ていること、ドイツ語は定冠詞が照応を示すことが多く、定冠詞と指示詞との境界が微妙であることを根拠に、韓国人学習者とドイツ人学習者の結果を母語による正の転移と解釈している。一方、中国人学習者の結果については、指示体系が大きく異なることから習得が難しくなると述べている。しかし、中国語はドイツ語と同じく2項指示体系である。同じ指示体系をなしているにもかかわらず、異なった結果が示されたことになっている。従って、母語転移の要因は、指示体系の違いだけでは解釈できない。さらに、中国語では、モノローグ発話は話し手の視点の変化に応じて、文が主題化される傾向があり、「na」が使われる傾向がある（Huang 1999）ため、単（2005）は中国人学習者が母語知識の「na」を日本語の「ア」に対応した形で過剰に使用したことの原因がある可能性を指摘した。その考察をふまえると、母語知識の過剰使用があるかどうかを特定するために、目標言語が中国語で母語が日本語の学習者のモノローグ発話を調査する必要があると思われる。

新村（1992）は、日本語と英語の指示詞の習得状況を、日本人英語学習者と英語母語話者日本語学習者とに分けて、クローズテストを通して比較分析した。その結果、日本人英語学習者は英語母語話者より指示詞 this、that を多用する傾向が明らかにされ、英語を母語とする日本語学習者は指示詞コソアの使用の欠如が確認された。その理由のひとつは、日本語は英語より、指示詞の語彙がはるかに豊富であることにあると新村は指摘している。つまり、表1に示されているように、目標言語の指示詞の使い分けに、母語知識の転移が生じていることが分かった。転移は母語知識に依存する戦略という形で現れる。

表1 母語知識に依存した戦略

指示詞の	語彙の数が多 L2（日本語）	語彙の数が少 L2（英語）
語彙の数が少 L1（英語）	使用回避	—
語彙の数が多 L1（日本語）	—	過剰使用

中国語の指示詞は、日本語と同じく、名詞的、形容

詞的、副詞的な語彙を有し、数が日本語と同様に豊富である。では、指示詞の語彙が同じく豊富な場合、日本語の指示詞の使い分けにおいてと、中国語の指示詞の使い分けにおいてでは、中国人日本語学習者と日本人中国語学習者の母語知識の転移が見られるのだろうか。見られるとしたら、そこにどのような戦略が使用されているのであろうか。その点においては本調査研究の具体的な課題のひとつとして、中国人学習者の母語による発話、日本人中国語学習者の目標言語による発話を調べることにする。

また、金水・田窪（1990）は、複数の系列の指示詞が使用可能な文脈において系列間の使用優先順位があることを発見し、日本語の指示詞の選択要因の「直示優先の原則」を導き出した。つまり、日本語の指示詞の「ダイクシス性優先」¹という特徴が見出されたのである。この特徴は、韓国語では弱くなること（金水 1999）、英語では見当たらないこと（金水・田窪 1990）から、日本語と他言語の間で差異が見られる（金水 1999）。

博士論文では、学習者が指示詞コソアを習得していく過程において、母語がいつ、どのような影響が見られるのかを明らかにした上で、特に母語が目標言語の習得の支障となった場合はどのように対処すればいいのかを提言したい。それを実現する為には、つぎのような研究調査を行う必要があると考えている。

- 2-1 日本語と同様な3項指示体系の母語（例えば韓国語）を持つ学習者の習得状況の究明
- 2-2 日本語と異なる2項指示体系の母語（例えば中国語）を持つ学習者の習得状況の究明
- 2-3 多言語多指示体系を同時に習得した場合の状況の究明
- 2-4 母語が中国語の学習者の比較群として、日本語が母語の中国語学習者の習得状況の究明

今回実施した海外調査研究は、2-2と2-4を究明するための研究の一環であった。従来の先行研究で指摘されていた問題点に基づき、習得上の問題点が母語によるものかどうかを明確にするために、学習環境という要因を考慮した調査である。学習者の母語が習得問題点の原因かどうかは、今回の調査結果を日本国内で収集するデータと比較することによって明らかになると思われる。

これまで、従来の研究で指摘されている日本語の指示詞コソアの習得上の問題点や、日本語と異なる指示体系を成す言語及び同じ指示体系を成す言語の対照

研究の成果を単(2005)にまとめた。そこに浮かび上がった問題点に基づいて、調査用質問紙やタスクを作成した。また、上記2-3に示されている「多言語多指示体系を同時に習得した学習者」の指示詞コソアの使用状況については、英語・スペイン語・日本語を同時に習得したトライリンガルの言語使用を調べており、ケーススタディの形で単(2004)にまとめた。

上記の2-2「日本語と異なる指示体系のL1を持つ学習者の習得状況」に関しては、第二言語としての日本語習得(JSL)環境のデータ収集は進行しているが、外国語としての日本語習得(JFL)環境のデータ収集は、質問紙による調査の部分しか終了しておらず(単2003にまとめた)、まだ不十分である。従って、本海外研究調査では、口頭タスクを加えることにした。そのほか、上記2-4「日本語がL1の中国語学習者の習得状況」という内容は今回実施した海外研究調査の一部となっていた。

なお、上記2-1「日本語と同様な指示体系(例えば韓国語)の母語を持つ学習者の習得状況」については、関連する先行研究のメタ分析を行うことが中心となっており、現段階では研究調査を行っていないが、今後、それを実施することも考えている。

3. 調査の対象・内容

調査の対象者は、中国で日本語を学習している中国人学習者170名及び中国で中国語を学習している日本人学習者30名であった²。また、中国語の指示詞の習得状況の調査結果が、果たして日本人中国語学習者の母語によるものかどうかを判別する比較群として、韓国人中国語学習者8名にも調査を実施した。

学習者の指示詞に関する文法知識を把握するために、質問紙による文法性判断テスト³を実施した。また、学習者の目標言語を母語とどのように対応しているのかを調べるために、翻訳課題⁴を実施した。指示詞の結束性という観点から、ストーリーを展開させていくときに、学習者がどのように指示詞を用いるの

か、母語と目標言語での用い方に違いがあるかを調べるために、漫画のストーリーを描写する口頭タスク調査を行った。調査の実施状況等は表2の通りである。

上記調査内容のほかに、協力可能な被調査者に口頭回答を通じてその指示詞コソアの習得状況の確認作業を行った。さらに、学習者が普段利用している教材等も調べた。

4. 調査結果・まとめ

前述した先行研究により、本海外研究調査では次のような具体的な課題を設けた。

- 1) 日本語の指示詞の「ダイクシス性優先」の特徴は、学習者の使い分けに見られるか。
- 2) 指示詞の使用に、母語との対応が見られるか。
- 3) モノローグ発話では、目標言語と母語とでは指示詞の使用傾向が同じであるか。
- 4) モノローグ発話では、中国人学習者のア系誤用が見られるか。

以下は課題ごとに現段階で分かった結果を述べる。

4-1 日本語の指示詞の「ダイクシス性優先」の特徴は、学習者の使い分けに見られるか。

文法性判断テストによる分析を行った結果、現場指示場面の、次のBの会話に用いられるような文例では、正用のア系を誤用のソ系にする中国人日本語学習者が多いということが確認された。

A:「あれはなんだろう。」

B:「あれは飛行船だよ。」

ソ系を選択した理由として考えられることは、中国人学習者は物理的な距離より、一度に話題に出たことを再度言及する「照応性」に注目したためであろう。つまり、日本語の「ダイクシス性優先」原則と異なった使用が観察された。口頭回答の内容によると、物理的な距離より、中国人学習者は照応という要素を重んじる傾向が見られた⁵。一方、同様な問題の中国語の

表2 調査の内容及び実施状況

対象者の母語	多肢選択	翻訳	漫画の描写	言語能力テスト
中国語	◎ (日本語)	○ (中→日)	○ (日本語、中国語)	◎ (SPOTテスト)
日本語	◎ (中国語)	○ (日→中)	◎ (中国語、日本語)	— (自己申告)
韓国語	◎ (中国語)	—	◎ (中国語、韓国語)	— (自己申告)

「◎」：全員に実施した。「○」：一部の被調査者に実施した。「—」：実施しなかった。

調査では、中国語ではBの会話はnaを使うのが普通であるが、日本人中国語学習者の全員が正用のnaを選択している。つまり母語知識から目標言語への正の転移が見られた。

Nimura & Hayashi (1996) は、指示詞の決定要因は、英語では指示対象への注意の度合いが重要な要素となっているのに対し、日本語では、指示対象が話し手の直接知識の領域に入るかどうかが重要であると指摘している。このような弁別要因がいったん母語に知識化されてしまうと、目標言語の指示詞の使い分けに容易に転移されると思われる。上記のような中国人日本語学習者の誤用も、母語で形成された弁別知識を目標言語に無意識的に借用した結果であると思われる。

4-2 指示詞の使用に、母語との対応が見られるか。

翻訳課題を分析したところ、独り言のシチュエーションでは、中国人学習者が「zhe→コ」、日本人学習者が「ア→na」と対応する傾向が確認された。それはたとえば次の例文のようなものである。

(お母さんは家に帰ったら子どもがいないことに気づき、独り言を言った。)

「あの子、どこに行ったんだろう。」

(母亲回到家里，发现孩子不在家，自言自语道)

“这孩子，跑到哪儿去了？”

上記のような独り言のシチュエーションでは、日本語はア系しか使えないが、中国語はzhe系しか使えない。中国人学習者が母語のzheを日本語のコに対応するストラテジーが単 (2003) でも報告されている。今回の調査では、日本人中国語学習者が母語のアを中国語のnaに対応するストラテジーが確認されたことから、独り言のシチュエーションにおいては、母語が指示詞の習得に強く影響することがうかがわれる。

4-3 モノログ発話では、目標言語と母語とでは指示詞の使用傾向が同じか。

中国人日本語学習者及び日本人中国語学習者の目標言語および母語によるモノログ発話を分析した。その結果、中国人日本語学習者の場合は、母語 (中国語) においても目標言語 (日本語) においても指示詞の使用が少なかったが、中国語より日本語のほうが使用数が多く確認された。一般的には、日本人母語話者が照応のソ系指示詞をより多く用いる。しかし、全体的に中国人日本語学習者がソ系の使用が少なかった。ま

た、ア系の誤用が目立つところがあった。

一方、日本人中国語学習者の場合は、目標言語 (中国語) より母語 (日本語) での指示詞の使用のほうが多いことが確認された。もうひとつ興味深い現象は、目標言語における三人称代名詞を多用することである。漫画の主人公のことを終始中国語の三人称代名詞「ta」で代用し、ストーリーを展開させていく日本人中国語学習者は少なくなかった。

単純照応 (前述した指示対象を繰り返し指し示すだけといった機能) の場合は、中国語はtaのような三人称代名詞を使用することがあるが、話し手と聞き手の両方に共通する知識として使われることが多い (高2002)。その代わりに、「zhe + NP」と「na + NP」が多用される (Miura & Christensen 1991)。また、Huang (1999) で示されたように、中国語では、話し手の視点の変化に応じて、文が主題化される傾向があり、「na」が使われる傾向がある。したがって、聞き手に良く分からない情報を連続したtaで提示するのは、聞き手にしてみれば違和感を覚えることになる。

4-4 モノログ発話では、中国人学習者のア系誤用が見られるか。

中国人日本語学習者の日本語によるモノログ発話を分析した。その結果、渡邊 (1996) と同様に、照応のソ系指示詞の使用が少なく、ア系誤用が観察された。L1では、ア系に対応する部分では「na」の使用が見られた。日本語ではモノログの発話は照応性が重視され、一貫したソ系が用いられるが、中国語では、話し手の視点の変化に応じて、文が主題化される傾向がある。この特徴は、渡邊 (1996) で提示されている中国人学習者の母語による発話にも見られている。中国人学習者は母語のストラテジーを過剰に目標言語の日本語に適用し、結果として遠称のア系が選ばれることになるということがうかがわれる。つまり、単に指示体系の違いだけでなく、母語のストラテジーの過剰使用による結果であると考えられる。

以上示されたように、言語によって指示詞の選択に優先となる要因が同じこともあれば異なることもある。優先となる要因が同じであれば、正の転移を促進することになるが、その要因が日本語の原則と著しく異なる場合は、誤用を引き起こす可能性が大きくなると考えられる。Nimura & Hayashi (1994) が指摘しているように、同時にいくつかの要因が指示詞の選択に影響を及ぼす場合、一番優先とされる要因の違いを教育において提示することが重要であろう。

なお、以上は現段階で分かった結果を述べたもので

あったが、現象の記述のみで詳細な考察にまだ至っていない。今後、今回の海外調査で収集したデータを更に細かく分析し、教材分析等の作業を進める必要がある。

5. 今後の予定

上記2章でも述べたように、本海外調査研究の結果は博士論文では、「日本語と異なる2項指示体系の母語を持つ学習者の習得状況の究明」、「日本語が母語の中国語学習者の習得状況との比較」の二つの研究に生かされることになる。また、本海外調査研究の結果は、下記のようなテーマにて研究ジャーナルへの投稿及び学会での発表を通して公表する予定である。

投稿先：『日本語教育』

中国語を母語とする学習者の指示詞コソアの習得に関する研究—ダイクシス用法を中心に—(仮)
中国語を母語とする学習者の指示詞コソアの習得に関する研究—照応用法を中心に—(仮)

投稿先：『日中言語研究と日本語教育』

指示詞の習得における母語の影響に関する考察—中国人日本語学習者と日本人中国語学習者の指示詞の習得状況の比較を通して—(仮)

学会発表：第二言語習得研究会全国大会

母語知識が指示詞の使い分けにどのように転移するか(仮)

謝辞 今回の海外研究調査は、浙江工業大学の張麓營先生、王偉先生、北京日本学術研究センターの朱桂榮先生、北方工業大学の趙玉婷先生、大連理工大学の王冲先生、大連外国語大学の潘曉春先生、宋岩先生、王賀さんから多大なご協力を頂いた。調査に参加した方々も親切に協力して下さいました。また、本稿の執筆にあたり、川北園子さんから内容について貴重な助言を頂いた。アルバーディング聖子さんから英語に関するアドバイスを頂いた。ここに厚く感謝申し上げます。

注

1. 金水 (1999) では、直示を「談話に先立って、言語外世界にあらかじめ存在すると話し手が認める対象を直接指し示し、言語的文脈に取り込むことである」(同:68)と定義している。この定義によると、「直示」は発話の場にいなければ十分な理解ができない性質をもつ「ダイクシス (Deixis)」(田中1981「[コソア]をめぐる諸問題」『日本語教育指導参考書8 日本語の指示詞』1-50)に包含されると思われるので、ここでは「ダイクシス」と

いう用語に代える。

2. 今回の研究調査に協力して下さった被調査者は、浙江工業大学、北京外国語大学、北京工業大学、北京日本学術研究センター、大連理工大学、大連外国語大学に在学している学部生、大学院生、留学生及び外国人講師の方々だった。
3. 文法性判断テストは、たとえば次の例題のような多肢選択によるものである。指示詞の判断には、文脈の正確な理解が重要であるため、文脈を示す部分は、被調査者の母語で示した。
(B手里拿着一个订书机, A想知道“订书机”用日语怎么说)
A: {これ・それ・あれ} は日本語で何と言いますか。
B: {これ・それ・あれ} は「ホッチキス」と言います。
4. 翻訳課題は、たとえば次の例題のように、下線のある部分を被調査者に目標言語に翻訳を求めたものである。
母亲回到家里, 发现孩子不在家, 自言自语道: “这孩子, 跑到哪儿去了?”
5. 被調査者の一部は、ソを選択した理由を「一度話題に出たから」と説明していた。つまり、物理的な距離より、照応性を選択の最優先要素にしているのである。

参考文献

- Huang, S. (1999) The emergence of a grammatical category definite article in spoken Chinese, *Journal of Pragmatics*, 31, 77-94
- 金水敏 (1999) 「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』6(4), 67-91
- 金水敏・田窪行則 (1990) 「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展 特集 メンタル・スペース』3, 85-115
- 高華萍 (2002) 「指示詞把握実態調査とその誤用分析—中国人学習者を対象に—」『北條淳子教授古稀記念論集』83-95
- Miura, I. & Christensen, K. A. (1991) The Use of Anaphoras in English, Japanese and Chinese, 『京都教育大学紀要A 人文・社会』79, 127-134
- 新村朋美 (1992) 「指示詞の習得—日英語の指示詞の習得の対照研究—」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』4, 36-59
- Niimura, T. & Hayashi, B. (1994) English and Japanese demonstratives: A contrastive analysis of second language acquisitional: *Issues in Applied Linguistics*, 5, 327-351
- Niimura, T. & Hayashi, B. (1996) Contrastive analysis of English and Japanese demonstratives from the perspective of L1 and L2 acquisition *Language Sciences* Volume 18, Issues 3-4, 811-834
- 単娜 (2003) 「中国人学習者の指示詞「コ・ソ・ア」の習得に関する研究」お茶の水女子大学大学院修士論文(未公開)

単娜 (2004) 「あるトライリンガルの言語使用についての調査－日本語指示詞の使用を中心に－」長友和彦(編)『三言語併用環境における日本語の発達に関する研究』(平成14～15年度科学研究費補助金研究成果報告書) 87-99
単娜 (2005) 「日本語の指示詞に関する研究概観－対照研究を中心に－」『言語文化と日本語教育 2005年11月増刊特集号』 70-100
渡邊亞子 (1996) 『中・上級日本語学習者の談話展開』くろしお出版

要旨

この調査研究は、学習者の母語環境では、日本語の指示詞コソアがどのように習得されているのか、学習者の母語の転移を中心に調べたものである。比較群として、目標言語環境では、日本人学習者がどのように中国語の指示詞zhe/naを習得しているのかを調べた。その結果、いくつかの知見が得られた。(1)中国人学習者の現場指示の使い分けには、物理的な距離より、指示対象が一度話題に出たことの照応性を重んじる傾向があることが見られた。(2)独り言というシチュエーションにおいては、中国人日本語学習者も日本人中国語学習者も、一部の指示詞の用法に関しては、それぞれの母語の言語ルールの使い分けを目標言語に対応するようなストラテジーを取っていることが確認された。(3)モノログ発話では、母語においても日本語においても中国人学習者の指示詞の使用が少なかったが、中国語より日本語のほうが多かった。日本人学習者の指示詞の使用は、中国語より母語のほうが多かった。

たんな／お茶の水女子大学大学院 国際日本学専攻

【指導教員のコメント】

ここに掲載されている単娜氏の研究報告は、同氏の修士論文研究で浮かび上がった指示詞の習得における母語の影響(転移)をさらに厳密に解明することを目指し、中国人の日本語習得と日本人の中国語習得を対比するという斬新なデザインによる研究プロジェクトの第一次報告である。このような2言語間の双方向的研究アプローチは第二言語習得研究に重要な示唆を与えることはもちろん、従来各言語専攻の独立性があまりにも高いため相互の情報交換と連携が弱いといわれてきた日本における第二言語教育に新風を吹き込むものといえる。これを一つのきっかけとして異言語の専門家間の協力が道をひらくという意味でも、単娜氏の研究は重要な意義を担っている。今回単娜氏が現地で収集したデータは膨大であり、その分析が完了するにはまだ時日を要するが、今回の報告の時点で既にいくつかの示唆に富む知見を見いだしている。完成の暁には第二言語習得研究界に強いインパクトを与えることが期待される。

(人間文化創成科学研究科 准教授 佐々木 嘉則)